

学位(課程博士)論文審査及び最終試験報告書

2023 年 / 月 30 日

人間文化学研究科長
野 田 春 美 様

学位論文審査委員会

審査委員長 大原 良通
審査委員 赤井 敏夫
審査委員 長谷川 弘基
審査委員 上田 学
審査委員 刈間 文俊



本学学位規則第 8 条の規程により、論文審査の要旨及び学位の授与に関し
下記のとおり報告いたします。

記

学位申請者	張 少博
論文題目	満州映画再評価の可能性についての研究 ～新中国映画との連続と断絶～

論文審査の要旨

張少博による「満洲映画再評価の可能性についての研究～新中国映画との連続と断絶～」は、関連雑誌、作中の歌詞、国策性の薄い娯楽中心映画、後継である長春電影制片廠の初期作品など、これまで満洲映画（以下、満映）研究ではあまり取り上げられてこなかった周辺資料を用いて、満映の実像を再構成し、その再評価に結びつけようとした研究である。

満映作品は散逸したり未公開となっているものが多く、一次資料を用いた分析が難しい。制作サイドから見ると、満映の中国人スタッフは新中国映画の長春電影に移行しており、また終戦後旧満洲に残留した日本人映画人もそれに助力したことから、両者の連続性は明らかであるが、残留日本映画人の名前が長年公式にされなかったことから判明するように、この点を強調することは長らくタブーとされてきた。満映はあくまで傀儡国家満洲国のイデオロギー宣伝機関であり、新中国の国家観とは相容れないという意味で、満映と新中国映画との間に横たわる断絶を大前提として分析することが必要とされたからである。しかし今世紀に入って「重写電影史」（映画史再評価）運動が起こると、両者の連続性を積極的に評価しようとする研究姿勢が目立つようになってきた。本研究もその一端に連なると言うことができよう。

上述のように満映研究では映像資料の不足が最大の問題点となるが、それを以下に挙げるような二次資料を用いて補完し、満映作品の特徴を抽出しようとしたところに、本研究の独創性がある。例えば満映関連会社は『電影画報』のような映画誌や『麒麟』のような文芸誌を刊行していたが、ここから満映の国策性の表現がドキュメンタリーや戦記のようなハードなコンテンツから、武侠怪神片のような娯楽中心のコンテンツに密かにイデオロギーを潜ませるといったソフトな方向へと転じたことを確認し、またその転換の経緯をあとづけることができる。また日本側の検閲を潜り抜けるべく、劇中歌の歌詞の中に当時人口に膾炙した左翼歌へのアリュージョンを潜ませることで、中国人映画人が国策宣伝に対して密かな抵抗を行っていたことも、本研究は明らかにしている。

こうした分析を通じて本論が強調している点は、満映を映画製作の現場として見た場合、そこは従来考えられてきたように、日本人映画人が中国人映画人に一方的に技術と経験を伝授する場ではなく、国策宣伝という限定された枠組みの中にあっても、両者が協力して「受ける」映画を作ろうとする共同作業の場であったことで、これが『復仇冤魂』（1939年）や『黒臉賊』（1942年）など、これまであまり注目されてこなかった娯楽作品に反映されていることである。

以上のように本論文は、高度な専門知識と技能を習得した上で、独創性に富んだ高い水準の研究成果を示しており、人間文化科学研究科博士後期課程のDPを十分に満たしたものであり、学位論文審査基準を満たしていることを確認し、博士(人間文化学)の学位を授与するに相応しいものと認める。